２０１０／１１／１４　　礼拝メッセージ　　近藤修司　牧師

主　　題：神による救いと人による救い３
聖書箇所：ローマ人への手紙１０章５－８節

「神による救いと人による救い」、パウロはそのことを教えています。神が与えてくださった救いと人間が自分の努力で得ることができると信じる、その誤った救いについてパウロはこれまで私たち一人一人にみことばを通して教えてくれました。前回見た、この１０章の４節を見ると、パウロは**「信じる人はみな義と認められるのです。」**と記しています。パウロはこの教えが神からの教えであるであること、聖書の教えであるということを明らかにしようとしています。自分の思いつきで語っているのでもなく、人間的な知恵によって教えていることでもないと、これは実は、もちろん、その当時は新約聖書は完成していませんが、旧約の教えでもあると、そのことをパウロは明らかにしようとしています。

５節には**「モーセは、律法による義を行なう人は、その義によって生きる、と書いてあります。」**とあります。実は、新約聖書のここには、原語に記されている前置詞が訳されていません。その前置詞を付けることによってパウロは、前の話を受けてその理由を述べようとしているのです。つまり、先ほど見たように「信じる人はみな義と認められる」と、今そのように語ったけれど、それがなぜ真理なのか、なぜそれが聖書的なのか、そのことをパウロはこれから述べて行こうとするのです。その理由を彼は教えようとするのです。パウロはこの後、旧約聖書のみことばを引用しながらそのことを教えて行くのですが、その前に簡単に、これから見て行く５節から１３節までのその大きな流れを見ます。５節から１０節までは、「義は信仰により得ることが出来る」とパウロは言います。つまり、救いは信仰によって得ることができるということです。１１－１３節を見ると、「義は信じるすべての人に与えられる」、救いは信じるすべの人に与えられるということをパウロは教えようとします。

さて、そのことを知った上で５節から見て行きましょう。

Ａ．律法による義　　５節

まず、パウロは「律法による義」について話します。５節をもう一度見ましょう。**「モーセは、律法による義を行なう人は、その義によって生きる、と書いてあります。」**、ここには面白い書き出しを見ます。**「モーセは、…と書いてあります。」**とこのように記すことによって、これが旧約聖書からの引用であること、モーセが言ったことを引用しているとパウロは言うのです。旧約聖書のレビ記１８：５のみことばをパウロはここで引用するのです。そこにはこのように記されています。**「あなたがたは、わたしのおきてとわたしの定めを守りなさい。それを行なう人は、それによって生きる。わたしは主である。」**と。このみことばはガラテヤ人への手紙３章１２節にも引用されています。パウロはこう言っています。**「しかし律法は、「信仰による。」のではありません。「律法を行なう者はこの律法によって生きる。」のです。」**、このようにパウロはローマ書でもガラテヤ書でもレビ記１８：５を引用しているのです。

ローマ１０：５を見ると**「その義によって生きる」**とあります。**「生きる」**と聞くと、普通は「永遠のいのち」のことではないかと思います。そのように見ると、パウロはここで**「律法による義を行なう人は、その義によって生きる」**と、つまり、律法を行なう人はその行ないによって永遠のいのちを得ると語っていると受け取れます。でも、ここで使われている**「生きる」**とはそのような意味をもっていません。永遠のいのちのことを言っているのではないのです。ダクラス・モーという一人の神学者は「旧約の文脈において「生きる」とは、律法をいただいた特権を喜び楽しむことを言う。必ずしも、永遠のいのちのことではない。」と言っています。

ですから、イスラエルの人々は神からこのようなすばらしい律法をいただいた、そのような特権に与った、それを喜びそれを楽しんでいる。そのことを**「生きる」**と言うのです。ですから、パウロはここで、永遠のいのちのことを話しているのではありません。しかし、このみことばが私たちに明らかにしていることは、「律法を守り行なうことによってのみ律法の義が与えられる。律法を守り行なうことによって救いを得ることができる。」ということです。

私たちがすでに学んで来たように、律法が与えられた目的は、私たちが神の要求していることに到達出来ない、それを守ることができないということを、私たちに悟らせるためであると、そのように見て来ました。ですから、私たちは律法を見たときに、「神さま、私たちはそれを守れません。このようなあなたの余りにも高い完全な基準には、どんなに頑張っても到達することができません。」と、そのことに気付いて、神の前にあわれみを求めます。それが本来の目的です。でも、ユダヤ人たちは違っていました。自分たちは律法を守っていると思っていた、そのように自負していたのです。

皆さん、なぜでしょう？なぜ、彼らは今の私たちが気付くように、この律法には到底到達出来ない、守ることができないということに気付かなかったのでしょう？そんなに難しいことではありません。神の基準をしっかり見るなら、それには絶対達し得ない者であると、そのことに気付くのはそんなに難しいことではありません。それにも拘わらず、彼らはなぜそのことに気付かなかったのでしょう？

◎ユダヤ人が自分たちは律法を守れていると自負していた理由

実は、理由があるのです。マルコの福音書７章にそのことが記されています。１節**「さて、パリサイ人たちと幾人かの律法学者がエルサレムから来ていて、イエスの回りに集まった。」**、彼らはイエスにイエスの弟子たちに関してあることを非難します。**「:2 イエスの弟子のうちに、汚れた手で、すなわち洗わない手でパンを食べている者があるのを見て、:3 ――パリサイ人をはじめユダヤ人はみな、昔の人たちの言い伝えを堅く守って、手をよく洗わないでは食事をせず、:4 また、市場から帰ったときには、からだをきよめてからでないと食事をしない。まだこのほかにも、杯、水差し、銅器を洗うことなど、堅く守るように伝えられた、しきたりがたくさんある。――:5 パリサイ人と律法学者たちは、イエスに尋ねた。「なぜ、あなたの弟子たちは、昔の人たちの言い伝えに従って歩まないで、汚れた手でパンを食べるのですか。」**、このような教えがあったのです。そして、このパリサイ人や律法学者はその教えを守っていたのです。だから、それを実践していないイエスの弟子たちを見て、彼らはイエスにこのように尋ねるのです。イエスを責めるのです。

ご存じのように、イスラエルの人たちの間には、大きく二つの律法があります。「成文律法」という聖書に書かれた律法です。彼らはそれを一生懸命守ろうとしました。それだけでなく「口伝律法」があります。人々が長年に亘って作り上げて来たもので、その中の一つがここにある「手を洗ってパンを食べる」というものです。イスラエルの人たちはそれらを守っていたのです。彼らは少量の水をとって、パンを食べる前に両手をその水に浸します。指先を上に向けて汚れた水が指先に戻って来ないように、手首から流れ落ちるのを待ちます。次に、手首を逆にして水をかけ、片手のこぶしで片方の手を清めるのです。もう片方も同じようにします。そして、パンを食べるのです。彼らはそのことをパンを食べる前にも、食事中も料理が変わるごとにそのようにしたと言います。このような口伝律法が存在したのです。ですから、彼らはそれに基づいて「おかしいではないか？守っていない！」と言ったのです。

もう一つは、１０節に出て来ますが、**「モーセは、『あなたの父と母を敬え。』また『父や母をののしる者は、死刑に処せられる。』と言っています。」**という律法です。ところが、イエスはこの後彼らを責められるのですが、彼らはその律法を自分たちの都合の良いように曲げていました。１１節に**「それなのに、…」**とあります。つまりイエスは、モーセの教え律法と、パリサイ人や律法学者がしていることとを比較しているのです。続いて**「…あなたがたは、もし人が父や母に向かって、私からあなたのために上げられる物は、コルバン（すなわち、ささげ物）になりました、と言えば、:12 その人には、父や母のために、もはや何もさせないようにしています。」**とあります。**「コルバン」**とは「主へのささげもの、主への贈り物」という意味です。ですから、子どもたちは親を世話をするということで、お金を持って行ったとして、それを使いたくないと思ったときに「コルバン」と言います。本当は親のために使おうと思ったけれど、神にささげたから申し訳ないけれど世話をすることはできないと、このようなことが行なわれていたのです。そのように決心して宣言しても、後になって、間違っていたから取り消したいとしても、当時の律法学者たちは民数記３０：２のみことば**「人がもし、主に誓願をし、あるいは、物断ちをしようと誓いをするなら、そのことばを破ってはならない。すべて自分の口から出たとおりのことを実行しなければならない。」**を取って、そのようにはさせなかったのです。彼らはいかにみことばを自分たちの都合の良いように活用していたかが分かります。親に使わないで自分のために使いたいとなったなら、もう一度「コルバン」と言えばよかったのです。このように彼らは神の律法の基準を自分たちが守れる基準に引き下げたのです。それで、自分たちは守っていると言えたのです。

思い出しませんか？裕福な青年がイエスのもとにやって来て、**「「先生。永遠のいのちを得るためには、どんな良いことをしたらよいのでしょうか。」**（マタイ１９：１６）と質問しました。そのときにイエスは「戒めを守りなさい」と言われました。そうすると彼は**「そのようなことはみな、守っております。何がまだ欠けているのでしょうか。」**（１９：２０）と驚くべきことを言いました。彼はそのようなことは守っていると思っていたのです。ですから、この当時の人たちの問題は、守ることが出来ない完全な律法を、守れるように自分たちの基準に引き下げていたことです。このような問題があったのです。だから、彼らは「私たちは律法を守っている」と自負していたのです。

イエスの答えを見てください。マルコ７：６－９**「:6 イエスは彼らに言われた。「イザヤはあなたがた偽善者について預言をして、こう書いているが、まさにそのとおりです。『この民は、口先ではわたしを敬うが、その心は、わたしから遠く離れている。:7 彼らが、わたしを拝んでも、むだなことである。人間の教えを、教えとして教えるだけだから。』 :8 あなたがたは、神の戒めを捨てて、人間の言い伝えを堅く守っている。」 :9 また言われた。「あなたがたは、自分たちの言い伝えを守るために、よくも神の戒めをないがしろにしたもので**

す。」、そして、１３節「**こうしてあなたがたは、自分たちが受け継いだ言い伝えによって、神のことばを空文にしています。そして、これと同じようなことを、たくさんしているのです。**」

もし、律法を守ることによって義を得ようとするなら、救いを得ようとするなら条件があります。ガラテヤ人への手紙３：１０にはこのように記されています。「**というのは、律法の行ないによる人々はすべて、のろいのもとにあるからです。こう書いてあります。「律法の書に書いてある、すべてのことを堅く守って実行しなければ、だれでもみな、のろわれる。**」と。ですから、神の要求は、９割できたから大丈夫、合格点だ、ではなく、１００％神が命じたすべてのことを完璧に守ることです。これが神の条件です。ですから、ヤコブがヤコブ書２：１０で言ったことは真理です。「**律法全体を守っても、一つの点でつまずくなら、その人はすべてを犯した者となったのです。**」。ですから、もう説明をしなくても皆さんよくお分かりのように、律法を守ることによって救いを得ようとしている人々、パウロのことばを使えば「律法による義を行なう人、律法を行なうことによって救いを得ようとしている人たちは、神の律法を１００％完璧に守らなければいけない。それが条件。」なのです。

そのような人はどこにもいません。だから、宗教には救いはないのです。宗教をどんなに一生懸命信奉し、自分たちを満足させたとしても、聖い正しい神を満足させることはないのです。なぜなら、神が要求されていることは、救いを得ようとするなら、神と和解しようとするなら、天国に入ろうとするなら、あなたはあらゆる点において、ことばだけでなく考えることにおいても想像においても、すべての点において完璧に聖くあることです。残念ながら、私たちはもうすでに罪を犯した者です。その基準から外れた者です。律法によって救いを得ることは不可能なことです。まず、パウロはそのことを教えた後、６節から「信仰による義」について話します。

Ｂ．信仰による義　　６－１０節

６節は「**しかし、**」と始まります。明らかに、５節と対比しています。５節「律法による義を」と６節「信仰による義」を対比しています。そして、６節から８節を見ると、これは申命記からの引用です。６節のみことばは、申命記９章４節と３０章１２節からの引用です。７節は申命記３０章１３節から、８節は申命記３０章１４節からの引用です。申命記のみことばを見て、このローマ書のみことばを見るとすぐに気付くことは、パウロは申命記のみことばをそのまま引用していないということです。

６節「**しかし、信仰による義はこう言います。「あなたは心の中で、だれが天に上るだろうか、と言ってはいけない。」それはキリストを引き降ろすことです。**」　→　申命記９：４「**あなたの神、主が、あなたの前から彼らを追い出されたとき、あなたは心の中で、「私が正しいから、主が私にこの地を得させてくださったのだ。」と言ってはならない。これらの国々が悪いために、主はあなたの前から彼らを追い出そうとしておられるのだ。**」、３０：１２「**これは天にあるのではないから、「だれが、私たちのために天に上り、それを取って来て、私たちに聞かせて行なわせようとするのか。」と言わなくてもよい。**」

７節「**また、「だれが地の奥底に下るだろうか、と言ってはいけない。」それはキリストを死者の中から引き上げることです。**」　→　申命記３０：１３「**また、これは海のかなたにあるのではないから、「だれが、私たちのために海のかなたに渡り、それを取って来て、私たちに聞かせて行なわせようとするのか。」と言わなくてもよい。**」

８節「**では、どう言っていますか。「みことばはあなたの近くにある。あなたの口にあり、あなたの心にある。」これは私たちの宣べ伝えている信仰のことばのことです。**」　→　申命記３０：１４「**まことに、みことばは、あなたのごく身近にあり、あなたの口にあり、あなたの心にあって、あなたはこれを行なうことができる。**」

このように、全部を引用いているのではなく下線部分だけを引用しています。ですから、ある人々はこれは問題ではないかと言います。でも、皆さんに気付いて欲しいのは、５節に「**モーセは、･･･と書いています。**」と書かれています。こうしてパウロは旧約聖書のモーセのことばを引用しました。でも、６節から見るとそのようには書かれていません。パウロがしたことは、旧約のみことばを引用してそこに解釈を記しているのです。そして、この旧約聖書のみことばをキリストに適用しているのです。というのは、６，７，８節の最後は「**…ことです。**」と書かれているからです。６節は「**それはキリストを引き降ろすことです。**」と書かれています。「**それは…です。**」と。７節には「**それはキリストを死者の中から引き上げることです。**」と、ここにも「**それは…です。**」とあります。そして、８節には「**これは私たちの宣べ伝えている信仰のことばのことです。**」と書いてあります。このような書き方、「それは･･･です。これは･･･です。」と３回出て来ます。神学者のトーマス・シュレイナーは「このように記しているというのは、みことばを引用しその説明を与えるという、ユダヤ人の聖書解釈の慣わしであることを明白にしている。」と言います。ユダヤ人はこのような書き方をすると言うのです。ですから、パウロは旧約聖書のすべてのことばを引用するのではなく、そのことばを引用して、そこで言いたかったことを解説し

て加えているのです。
　この６節から見て行くと**「しかし、信仰による義はこう言います。」**と、お気付きのように「信仰による義」が擬人化されています。「信仰による義」が話しているのです。何を語ったのか？それは「このようなことをしてはならない」ということを言っているのです。そして、それを言った後、パウロは説明を加えるのです。６－８節を見ると、この文脈から明らかなことは、パウロはここにイスラエルの不信仰について記しています。ですから、それをもってパウロは「彼らがそうであったように、あなたたちもそのような不信仰をもってはならない」ということを警告しようとするのです。

１．してはならないこと　　６－７節

　６－７節を見ると、二つの「してはならないこと」、二つの否定が記されています。

１）「あなたは心の中で、だれが天に上るだろうか、と言ってはいけない。」

パウロの説明・解説＝「それはキリストを引き降ろすことになる。」

　先ず、６節のみことばを見ると、**「しかし、信仰による義はこう言います。「あなたは心の中で、だれが天に上るだろうか、と言ってはいけない。」それはキリストを引き降ろすことです。」**とありますが、ここでパウロは彼自身の解説を加えています。**「それはキリストを引き降ろすことになる。」**がそうです。何のことを話しているのでしょう？結論から言うと、ここで警告されていることは「キリストの受肉」です。主イエス・キリストが人となってこの世にお生まれになったという、その受肉を否定してはならないということを警告しているのです。なぜ、そのように言えるのか？**「だれが天に上るだろうか」**と書いてあります。**「天に上る」**ことです。もちろん、この**「上る」**ということばは、様々な所を見ると「二階に上る、エルサレムに上る」と、そのようなときに使うことばがここで使われていますが、同時に、聖書の中では「天に上る」ときにもこのことばを使う訳で、この箇所はそのように使われています。ですから、ここで**「天に上る」**という訳が為されているのです。では、何のために「天に上る」と言っているのでしょう？それはそこにあって救い主を捜すためです。救いを得るためです。天に上って救い主を捜して、そして、救いを得ると言うのです。ですから、信仰による義はこう言います。「それは大変愚かなことです。」と。

（１）天に上ることは不可能

　なぜなら、私たちのうちにだれか天に上ることができる人がいますか？不可能なことです。イエスはこのように言われました。ヨハネの福音書３：１３**「だれも天に上った者はいません。しかし天から下った者はいます。すなわち人の子です。」**、ご自分が人となられた神だということを明らかにされたのです。ですから、ここで「信仰の義」が警告していることは、不信仰な人々が「天に上って救い主にお会いできるなら、そこに救いがある。」などと言うのは愚かなこと、天に上ることは不可能だということです。

（２）その必要がない

　二つ目にパウロが言いたいことは「その必要はない」ということです。「たとえ、それが可能であったとしても、それができたとしても、天に上っても救いを得ることはない。」と言います。パウロの解説を見ると**「それはキリストを引き降ろすことになる。」**と書いています。**「引き降ろす」**とは「この世に来られた」ということです。つまり、救い主キリストをこの世に連れて来るということです。おかしいことです。なぜなら、救い主キリストはもうすでにこの世に来られたからです。ベツレヘムでお生まれになったのです。ですから、ここで指摘されたイスラエルの不信仰は、救い主キリストが人としてお生まれになったことを信じないことです。救い主はもうすでに来られているのに救い主を連れて来なければいけないと、それが問題だと言うのです。
　ですから、ここでパウロは「救い主がこの世に来てくださった。人となられた受肉を否定するようなことがあってはならない。」と警告したのです。

２）「だれが地の奥底に下るだろうか、といってはいけない。」

パウロの説明・解説＝「それはキリストを死者の中から引き上げることです。」

　二つ目の警告が７節にあります。**「また、「だれが地の奥底に下るだろうか、と言ってはいけない。」**、この警告に対するパウロの解説は**「それはキリストを死者の中から引き上げることです。」**です。結論を言うと、ここで警告されていることは「キリストの復活を否定してはならない。」ということです。先ほどみたように、７節は申命記３０：１３のみことばの引用ですが、そこを見ると**「…「<u>だれが</u>、私たちのために<u>海のかなたに渡り</u>、それを取って来て、私たちに聞かせて行なわせようとするのか。」…」**とあります。７節には**「海のかなた」**ではなく**「地の奥底」**と書かれています。皆さん驚かなくてもいいです。というのは、**「海のかなた」**というのは、例えば、ヨナ書２：５では**「水は、私ののどを絞めつけ、<u>深淵</u>は私を取り囲み、海草は私の頭にからみつきました。」**と「深淵」、２：６の初めには**「私は<u>山々の根元</u>まで下り、」**と「山々の根元」と訳されています。

つまり、ユダヤ人たちの考え方では**「海のかなた」**と**「地の奥底」**は同じように見られていたのです。ですから、パウロは全く誤って引用しているのではないのです。パウロが**「地の奥底」**と言ったとき、それは「深い穴、底知れず深いもの」です。新約聖書にはこのことばは９回出て来ますが、このローマ書以外はすべて「底知れぬ所」と訳しています。ルカ８：３１に**「悪霊どもはイエスに、底知れぬ所に行け、とはお命じになりませんようにと願った。」**とありますが、これ以外はすべて黙示録の中に出て来ます。

また、ギリシャ語の辞典を見ると、この場所は「死者が留まっているところ」と説明されています。それを頭に入れてもう一度７節の最後のパウロの説明を見ると、彼が何を言いたかったのかが明らかです。**「それはキリストを死者の中から引き上げることです。」**、これは「よみがえり」のことです。ですから、**「地の奥底に下る」**とは「死者のいる所、死んだ人々がいる所に下ること」ですから、その必要はないと言うのです。先ほどと同じです。先は**「天」**でしたが、今度は「死者がいる所」です。天に上ることはそこで救い主を捜して救いを得るためでしたが、同じ目的です。死者がいる所に行って救い主を捜して救いを得るためです。

「信仰による義」が言います。「それは非常に愚かなことだ。」と。なぜなら、その必要がないからです。例えそれが可能なこととして、私たちが救いを得るために「地の奥底」、死者が留まっている所に下ったとしても、私たちは救いを得ることなどありません。なぜなら、人は行ないによって救われないからです。このパウロの説明を見ると、**「死者の中から引き上げる」**というのは「死からのよみがえり」のことです。つまり、ここでパウロは「あなたがたの言っていることはおかしい。人々の考えていることはおかしい。あなたがたがしようとしていることは、死んだ救い主をよみがえらせようとすること、イエス・キリストはもうすでによみがえった。」と言っているのです。

つまり、ここでパウロが指摘している人々の不信仰とは、イエスは死からよみがえって来たことを信じていないという不信仰です。イエスが天から降りて来たことを信じていない人は、イエスをこの地上に連れて来なければいけないと言い、イエスがよみがえったことを信じていない人は、よみがえらさなければいけないと、そのように言うのです。パウロは「それはもうすでに起こったことだ」と言います。つまり、キリストが肉体をもってこの世にお生まれになったという受肉も、キリストが肉体をもって死からよみがえって来たというよみがえりも、そのどちらも信じていない不信仰を警告しているのです。そのような不信仰な者であってはならないと７節でパウロは警告をするのです。

その警告の後、８節を見ると、今度は反対に「何をするべきなのか」を教えています。

２．するべきこと　　８節

８節**「では、どう言っていますか。「みことばはあなたの近くにある。あなたの口にあり、あなたの心にある。」これは私たちの宣べ伝えている信仰のことばのことです。」**、６節ではキリストの受肉が話され、７節ではよみがえりが話されました。そして、８節にはそのことによって神は義を備えてくださったと言っています。これが救いのメッセージなのです。私たちは救いを得るために、天に上る必要も、また、地の奥底へ下る必要もないのです。神の義を得るために必要なことは、神が備えてくださった救いを、信仰をもって受け入れることです。間違っても、義を得るために、救いを得るためにこのような不可能なことを達成しようと考えてはならないと言うのです。天に上ろうと思っても、地に下ろうと思ってもできないことです。律法も同じことです。できないことを一生懸命やることによって救いを得る、それが実現不可能であるゆえに、あなたがたが望んでいる救いは得ることも不可能だと言うのです。

では、しなければいけないことは何でしょう？「神の成された救いのみわざを信仰をもって受け入れること」です。パウロはそのことを言うのです。それが私たちに必要なことです。律法にすべての点で完璧に従われたのはイエスだけです。彼の行動も彼の想像していたことも彼の態度も、そのすべてが全知なる主なる神の前に喜ばれたのです。イエス・キリストのうちには罪が何にもなかった、すべての点で完全です。だから、律法を完璧に守り行なうことによって救いを得ることができるということ、それが可能なのはただ一人、イエス・キリストだけです。その罪のない完全な方が、あなたのいけにえとして十字架で死んでくださったのです。そして、約束通りに三日目によみがえってくださった。神が備えてくださったこの救いのみわざを信仰によって受け入れるなら、神は義を与えてくださるのです。

完璧ないけにえがもたらした救いは完璧です。それまで人間は一生懸命いけにえをささげました。でも、いけにえの動物の血は私たちの罪を完全にすべて洗い流すことはできません。そのいけにえは不完全です。しかし、神が送られた完全ないけにえ、この小羊は完璧ないけにえであったゆえに、あなたのすべての罪を完全に赦すことができるのです。神はそのようないけにえを送ってくださったのです。このイエス・キリストによってのみ備えられた救いこそが、私たちをそのすべての罪から完全に洗い清めてくださるのです。信仰しかないのです。この神の救いを信仰をもって受け入れることしかないと言うのです。

私たちがよく聞くことは「どの宗教でも同じではないか。」ということです。しかし、私たちが言うことは、人間として立派な人たちがいろいろなすばらしい教えを始めたかもしれませんが、罪の赦しをもたらすことはできません。なぜなら、どの宗教を見てもそこには十字架はありません。立派な人がだれかの身代わりになって死んだかも知れませんが、その立派な人も私たちと同じ罪をもった人間です。罪のない唯一のお方、人類の歴史の中でたった一人だけ罪のないお方がいました。それはイエスです。イエスは何のためにこの世に人として来られたのでしょう？もうすでに私たちが見たように、あなたや私をその罪から救うためでした。その方があなたに代わってあなたの罪のさばきを受けてくださったのです。あなたの身代わりとして、あなたのいけにえとして、彼が十字架で身代わりに死んでくださった。この身代わりにより、神は信じるあなたにすばらしい救いを与えると約束してくださったのです。私たちには十字架があるのです。罪のない小羊があなたや私に代わって死んでくださった十字架、そして、主は敢然と約束通り三日後にその死からよみがえって来られました。この方が救い主であることを父なる神は明らかにしてくれたのです。ここに救いがあるのです。

パウロはこの８節で**「みことばはあなたの近くにある。あなたの口にあり、あなたの心にある。」**と言いました。何のことでしょう？説明します。**「これは私たちの宣べ伝えている信仰のことばのことです。」**と続きます。パウロたちはメッセージを語り続けたのです。イエス・キリストにある救いのメッセージを語り続けたのです。パウロは言います。「このみことばはあなたたちの非常に近い所にある。」と。人々はこのメッセージを聞いていたからです。そして、先ほど見たように、それゆえに私たちの責任は、私たちの身近にあるメッセージ、私たちが聞いているこの救いのメッセージを心から受け入れることです。

ですから、パウロは「口で」とは言わず**「あなたの心にある」**と心のことを話します。そのことは９節でも、その後を見たときにも教えられることです。信仰とは口で何かを言うことではありません。信仰は私たちの心がそれを受け入れたかどうかです。私たちの心がカギです。ここにおられる皆さんも、イエス・キリストのおことばを聞き、そして、そのメッセージを心から受け入れたと確信しています。そのような人たちは神の救いをいただき、神によって変えられ、神の栄光を現わす者として日々変えら続けて行きます。そのような新しい歩みが始まったのです。なぜですか？心で信じたからです。頭に知識として持っている人は山ほどいます。この日本でもそうです。しかし、どれ程知識としてその真理を知っていたとしても、それは私たちを救いません。信仰が私たちを救うのです。神が備えてくださったこの救いを心から信じ受け入れるのです。パウロはそのことを私たちに教えようとするのです。この救いは遠くにあるのではありません。**「あなたの近くにある」**と言います。語られている神の福音のメッセージに対して、信仰をもって応じることが必要です。

今日は学びませんが、９節と１０節を見ると、６節から８節までの今私たちが見て来たところでパウロが語った「義は信仰による」ということの結論を述べています。パウロは８節で申命記３０：１４を引用して口と心に言及しています。そして、９節において、彼はこれらをさらに詳しく述べています。

次回、私たちはこの大切なみことばを見て行きます。信じるとはどういうことなのか？救われる信仰とはどういう信仰なのか？私たちが勝手に救われたと思っている、そのようなことがないためには、神が「どうしたら救われると言っておられるのか？」、その教えを聞かなければいけません。救いとは、神の恵みであり、神が備えてくださった救いを受け入れることです。私たちが見ているのは神が備えてくださった救いです。私たちがこうすれば救われるだろうと勝手に救いを作り出すようなら、戻らなければいけません。神が何と言われているのか？次回、私たちはそのことを学んで行きます。

最後に、皆さん、ご自分の心をよく吟味してみてください。私たち信仰者にとって大切なものは、私たちの心です。救われているあなたも神のすばらしさを頭ではちゃんと覚えています。イエスが私のために何をしてくださったのか、そのことを覚えておられます。でも問題は、あなたの心がその神のすばらしい恵みに対して相応しく応答しているかどうかです。あなたはその恵みを喜んでいますか？その犠牲を感謝しておられますか？主の約束されたすばらしい約束を覚えることによって心が希望に溢れていますか？信仰者の皆さん、すべて「心」です。皆さんはここに座っておられますが、皆さんの心は分かりません。でも、一番恐ろしいことは、主はそれをすべてご存じだということです。あなたの心はこの神に対して感謝に溢れていますか？喜んでいますか？「救われたことは本当に感謝です」とその恵みを称えていますか？それとも、ただ何となくこの時間を過ごしておられますか？礼拝の真似事をしているという、そんな人はいませんか？私たちに必要なことの一つとは「主を恐れること」です。「主を恐れる」とは、私たちは神に対して畏敬の念を持つことだと言います。しかし、みことばを見ると、信仰の勇者たちは畏敬の念を持つだけでなく、神を怖がったのです。神に対する非常な怖れがあったのです。なぜでしょう？私の心のすべてをご覧になっておられるからです。この真理は私たちを震えさせませんか？神をだますことはできないのです。神を偽ることはできないのです。すべて見ておられます。その

方の前にあなたも私も立つ日がやって来ます。
　あなたのすべてを見ておられる神の前に、今日、どのように生きて行きますか？私たちが願うことは私たちの心が今一度燃やされることです。感謝に溢れることです。喜びに、主を心から誉め称える、そのような者に、そのような心に変えられて行く…、皆さん、そうではありませんか？そのことを願って主を感謝しながら喜びながら、この一週間を歩んでください。

《考えましょう》
・律法による義を求めることは、どうして間違っているのでしょう？

・どうして人は律法による義を求めると思いますか？

・どうして人は主なる神が備えてくださった救いを受け入れないのでしょう？